

第十章 雪花

ベルが鳴った。

そして、ドアが開けられた。

その短い間に、私は自分の顔が縮んでしまったような張り詰めた緊張感をどうすることも出来ず、ついに体を起こした。ベルの音と共に周囲が一斉に騒がしくなって、座ってもいられなかった。せわしい靴の音、いきなりどこかの部屋からか聞こえて来る慟哭、そして、終わりのない悲鳴を上げ続けている人。

傷んでいて軋みながら開けられたドアはしばらくの間それ以上開けられもせず、かといって閉まりもせずに私の気を揉ませた。何かの手違いだったのか。もしかすると面会が取り止めになったんではないだろうか。平日に加えて年末にも重なっていたせいで、面会客はそれほど多くなかった。ここまでは比較的スムーズに事が運んだのに、まさか今この瞬間、事態がおかしくなるんじゃないだろうか？

私は兄が閉じ込められている向こうの世界について何も知らなかった。だから、一方的に面会が取り止めになったと言われても受け入れるしかない。私は必死で兄の気配を探ってみた。しかし、隣の面会人たちが出す音以外、何の気配も伝わって来なかった。

私は気持ちを落ち着かせる為にまた椅子に座った。すると私がその席に座っていないから兄を入れてやらなかったとでもいうように、その瞬間ドアが開けられ、ついに兄が姿を現した。兄は笑っていた。それもにつこりと。今までの私の不安と苛立ちをいっぺんに吹き飛ばすように。

韓服を着ていたからだろうか、兄はちょうど父の若い時の姿がそうだったというような雰囲気だった。兄から父を想像したのはそれが初めてだった。私は兄をもう少し近くで見たくて、必至で鉄格子に顔をくっ付けてみた。拳も入らないほど狭い間隔の鉄格子、それに指一本触れないように穴がポツポツと開いたガラスの間仕切りを挟んで、我々はそれ以上お互いを具に見ることが出来なかった。兄もこの障害物に気を取られているようだった。

「イライラするだろ？」

さらにこう付け加えた。

「お前に会いたかったんだ」

周りの騒がしきのせいで兄はかなり大声で喋っていた。こんな形で会うことになってしまったのは少し悲しいけど、どうしようもないだろうとでも言っているような兄の表情も、鉄格子に遮られて半分しか見えなかった。私はここまでやって来ておきながら、今までずっと自分の心に秘めていた気持ちを兄のようにあんなに自然に表現できずに困っていた。私は口の端を上げてちよっと笑うのが精一杯だった。「どうだった？」

たったそのひと言だけで、兄が昨日終った学力テストについて聞いていることがすぐに分かった。昨日、兄はずっと私のことを考えていたはずだ。兄にとっては、まだ私が三浪生なのだから。

「兄貴。俺、大学行かないんだ」

行けないんじゃないかって、行かない、と言う程度の自尊心ぐらいは、それでも私の中に残っていたようだった。自分でも気が付かないうちに顔が赤くなっただけ、それもまた鉄格子が隠してくれた。

「いい。それもいいだろう。お前が決めたことなら、それでいい」

いいという言葉がなんと三回だった。兄は私が怖気づいてビクビクしていると考えているようだった。生まれて初めてこの殺伐とした刑務所の中の風景に出くわした弟の怯えた顔がいじらしい、という表情がはっきりと読み取れた。だから兄はずっと明るく振舞っているようだった。

「大学に行かないにしても、それはそれでまた大変なことだろうなあ。どうかすると受験勉強をしてた頃よりも、もっとつらい時間だったはずだな」

兄はすごく優しくかった。それでも凍りついた私の口は全然滑らかにならなかった。自分の口があまり滑らかになるのは好きじゃないけど、それでもこの時だけはそうなって欲しかった。私が恐れていたのは、それはまさにこの「口ごもること」だった。自分が口ごもっている内に、短い面会時間を全部使ってしまうんじゃないかとヒヤヒヤしていた。

「俺のせいで……こんな兄貴のせいで、ずいぶん面白くない思いをしたんだろう。そうなんだろう？ 言わなくても、お前の顔に全部書いてあるぞ。俺はどうすればいい？」

兄がじつと私の目を見ながら言った。大丈夫だ、そんな心配なんかするな、と答えてやりたかったけど口がうまく開かなくて、私は唇だけを噛んでいた。本当にそうだった。兄が私を慰めるのには絶えられなかった。心だろうと、体だろうと、たとえどつちかが傷ついていたとしても、どうして兄にそんなことが言えるだろうか？

兄の事件は時間が経つに連れて次第に有名になった。しばらくの間は切れ目なく兄とイム・ヨンチュルに関する小さくない記事が紙面を占めていて、我々家族全員を戦々恐々とさせた。新聞が「報復殺人」、「拷問者処断」などの言葉で兄の事件を解析し論議し始めたのは、ある新聞が転載した兄の文章が呼び起こした反響だった。後になって聞いたところによると、兄の仲間達（特にホン・ジョンミ）が先頭に立ってすべての言論機関に兄の文章を郵送したということだった。

勿論、私も毎日新聞に鼻を押し付けて、一生懸命記事を読んでいた。私は新聞記事の、その曖昧な言葉遣いに驚いてしまった。一体何の事を言いたいのか、さっぱり分からなかった。後ろには逃げ道を残しておいて、あつちもこつちも全部悪いんだと言いながら、兄を英雄主義の稚拙な妄想に取り付かれた人間として速断するのがせいぜいだった。少しましな新聞社でも個人が直接出て行って断罪するこの現状に対しては、政治が責任を取るべきだと言う程度だった。

しかし、兄の文章を削除せずに掲載したある新聞社の論調が兄の立場を有利にした。ナチの戦犯が大戦後どのように追跡されて軍事裁判に回され、どのような判決を受けたのかを想起する必要がある、とその新聞が伝えていた。そして兄の事件の正当性を示そうと、連日拷問の被害者達の証言も載せていた。

私が何か言えるとしたら、兄が犯したことを理解する前に、事件の正当性などとは関係なく、ただ兄の弟ということだった。しかし兄が刃物を振り上げて血を流させたその瞬間を想像すると、あまりにもゾツとして、他の事などとも思い浮かばなかった。兄がどうしてもそれをしなければならなかったなら、兄をそうさせたこの世の中があまりにも多くの罪を犯しているんだと考えたこともあった。

今もそうだ。灰色の韓服に身を包んだ兄の痩せこけた体は、とても刃物を持った殺人者の形相ではなかった。いや、むしろ刃を刺された者の憔悴した、それでいて寛大な表情、という方に近かった。

私がグズグズしているうちに、兄が先に家族の様子を聞いて来た。姉は、と言いながら話し始めて、私は息を吸い込みながら短く返事をしてしまった。

「みんな元気だよ。姉ちゃんも」

兄はその返事だけ聞いて、それ以上家族の話を持ち出して来なかった。私は、姉について他の事を聞かれなかったのは幸いだったと思った。接見日誌を記録していた教導官が、その時私の顔をチラッと見

た。まるで「こいつ。嘘つくな」と言うような表情だったから内心ヒヤツとした。私は急に大事な報告事項をひとつ思い出した。ナソン旅館が売られたという事、と言うより、ナソン旅館が取り壊されて跡形もなく消え去ることになった、という事から伝えなければならなかった。

「兄貴。うちの家のことだけどさ、旅館が売れたんだ。大きな道路が通るから、うちの家もそれに引っかかってるんだ。だからもう全部売っちゃったんだ」

私は息もつがずに話した。もしかして兄の事件のせいでは我々が慌てて家を売って引っ越すと考えるかと思つて、ちよつと心配だったからだ。事実、そんな点が全くないとは言えなかった。兄が逮捕された日、その日がまさにナソン旅館が門を閉ざした日だったし、その日以降、母は商売から手を引いたのだから。

家を買ったという私の話には少しの間考え込んでいた。兄の顔をいろいろな表情がよぎったが、兄はそれ以上何も聞いたりしなかった。やがて兄はすごく淡々と言った。

「そんな時期にもなったんだろなあ」

そう言いながら兄は掛け時計をチラッと見た。それは兄の癖のようだった。入ってくる時も、兄は時計から確認していた。我々は二人ともカチカチと動く秒針の鋭い悲鳴からは自由になれないのだ。

時間が足りないと考ええると、余計に次の言葉を継ぐのが難しくなった。言いたいことは本当にたくさんあったのに。何から言えばいいのか・・・まだその順序も決められない程、胸の中は声を上げている言葉の渦でごった返していた。

しかし、私はうつむいたまま、しばらくコルテンのズボンの毛玉を取っていた。もどかしかった。空気もおかしかった。寒くはなかったけど、何かわからない寒々とした気流を私の敏感な鼻が捉えていた。私はピツタリくっ付いている教導官の横顔を伺った。彼が絶えず私の方におかしな空気を送っているのだと思つた。私が必要となく吐き出す言葉ひと言ひと言を誰かが書き写していると考えると、なんとなく嫌な気分だった。空気の抵抗、私が捉えた匂いはそれかもしれない。だ

「そうだ。カン・ヨンウ氏が二回ぐらい来てたぞ。いろんな意味で、たくさん後押しをしてくれたんだ」

今度も兄が先に話し出した。カン・ヨンウ。私はなんとなくその名前が思い出せなくて、何も答えることが出来なかった。

「お前の話をたくさんしてたな。俺達は、なんと言うか、まったく奇異な因縁なんだな」

ああ！ ムクドリおじさん。その時になって、私は気がハッキリとした。おじさんが兄を訪ねるなんて事は想像だにしていなかった。

「ウヨン、お前が自分の計画に気付いたかと思つて、しばらくは随分心配してたつて言つてたなあ。思慮深く、誠実で、本当にいい先輩に会つたつてことだ」

兄の口からムクドリおじさんの消息を聞くのは、ひどく妙な気分だった。その間のとんでもない待ちぼうけ、見当のつかない憂鬱な日々を思い出し、ぐつと息が詰まる思いだった。

「最初は彼の言葉が信じられなかったんだ。彼がどんな人間なのかわからず警戒までしてたんだ。それから驚愕したよ。でも、今となっては驚かないな。これまでの時代、あの凶暴な時代なら十分にあり得たことだったんだ。いくらでも」

私は気が抜けた。自分が兄とムクドリおじさんの間でぺちゃんこにされて標本にされた昆虫みたいに乾ききっていた日々もそうだったように、今でも世の中をまっすぐに見られないという事実は、本当にがっかりして気が抜けてしまう。ふたり・・・つまり兄とおじさんは、なんとか問題を解決したけど、私はこのゲームの中で最初からただの観客に過ぎなかったのだ。それは実に悲しいことだった。私は悲

しいと同時に、恐かった。その時、兄が低い声で私の名を呼んだ。

「ウヨン」

兄はもう一度私の名を呼んだ。すると、兄の頬を伝って一筋の涙がこぼれた。相変わらず顔いっぱい
の笑顔、流れる涙、私は息が詰まりそうだった。

「ウヨン、気を付けて帰れよ」

私は一生懸命頷いた。

「俺は少しも恥ずかしくない。お前には分からないだろうけど、こうやってお前に会えたから、恥ず
かしいことをしなくてよかったっていう気持ちになったよ。俺は自分の役割を果たしただけだ。大変だ
ったけど、後悔は絶対にしない。生きている俺達、お前と俺、そしてみんな、お互いに恥ずかしいとか
言いながらも、それでいてこれ以上ないほど大切な存在なんだ。誰も俺達の面倒を見てくれないんだ。
俺達が俺達に与えた役割を果たさない限り、生は支えられないようにできてるんだ。わかったか？ 兄貴
はな、魂までも悲鳴を上げる時代に生きて来たんだ。カン・ヨンウ氏を考えてみる。悲鳴があまりにも
ゾツとするだろ？」

ひと言ひと言に力をこめて話をしていた兄が急に言葉を切った。ムクドリおじさんの話をする時は明
るく笑ってた兄の微笑も消えていた。我々は必死で自分達の感情を抑えていた。兄に何か言ってやりた
くて気が焦った。壁時計はひたすら秒針を進めていて、私はずっと唇だけをヒクつかせた。やがて兄が
落ち着いた声で、また言葉を継いだ。

「俺はお前が来ると思ってたよ。知ってるか？ 俺がお前をものすごく気に入ってるって。どこにい
ても、どんなことをしても、俺にはお前がいたんだ……」

私はとうとう喋り始めそうだった。私の唇の緊張が解けていた。どんな言葉でもいいから言わないわ
けにはいかなかった。私は震える声で「自分の言葉」を言い始めた。

「兄貴、俺は……」

その時けたたましくベルが鳴りだした。面会終了を告げるベルに、私の言葉はそのまま葬り去られて
しまった。しかし、私は続けて喋ろうとした。言葉が出て来なかった。このまま終らせるわけにはい
なかった。

「兄貴がいなくて、どんなに寂しいかわかる？ 俺は……」

そこまで喋ってしまったら、カツと喉が詰まった。次の言葉を継げなかった。

「分かった。分かった。いつもお前には時間を割いてやれなかったからな。今もそうだけど。悪いな」
兄は椅子から立ち上がった。

教導官が兄の背中に手を添えた。もう出なければならぬという合図だった。兄は笑みを浮かべずに
私の顔を振り返って見た。

「お前、もうちよつと栄養取らなきゃな。いっぱい喰えよ」

その言葉を最後に兄は出て行った。催促していた教導官が軽く兄を押しした。間仕切りのガラスを叩き
ながら、私が声を張り上げたのはその瞬間だった。

「どうしてもやらなきゃならなかったのか？ 兄貴は頭がいいじゃないか。どうしてもその道しかな
かったのか？」

兄の後ろ姿が石のように固まったのが見えた。その頑強な岩のように固まってしまった姿が私をまた
泥沼の中に突き落とした。私はワツと泣き出した。

「いや、大丈夫だ、兄貴！ それでも俺は兄貴が好きだから。本当だ。信じて！ 俺はずっと兄貴の
ことを好きでいるから……」

兄はドアの向こうに消えていった。ドアが閉まる音が私の鼓膜を刺激した。私は両手で顔を覆ってすすり泣きだした。胸の中には言えなかった言葉が渦巻いていて、自分を抑えることが出来なかった。

私はそうやってしばらく自分を放って置いた。面会待合室の職員が来て私を引く張って行く時まで、私は激流から自分を引き上げられなかった。

結局は、こうやって面会を終えてしまうことは予想していたが、それにしても、もうちょっと上手くできなかったんだだろうか？ 私は自分自身にうんざりした。私の後頭部にはまた違う自分の目がいつもヒルのようにくっ付いていた。私は二重三重に閉じ込められていた。閉じ込められているのは兄ではなく、私の方だった。この憂鬱、この耐えがたい寂しさは兄から来るのではなく、私の中に起因していた。私は本当に愚かだった。

長い廊下を歩いて玄関まで来る間、私は気が遠くなるような感覚に何度もよるめいた。私が言ったすべての言葉が後悔の対象であり、私が言えなくて胸にしまっていたすべての言葉もまたつまらなかった。私はまるで水の流れが減った小川のゆらゆらしている飛び石に足を置いた時のように目まいがして恐かった。無事に向こう岸に着くことが出来るだろうか？

建物の玄関から正門の守衛室がある所までは、まだかなり距離があった。外に出て来ると、どっと寒さが押し寄せて来た。まだ乾いていない涙を拭きながら、ふと見ると、前庭にはエンジンを掛けたままの護送バスが一台停まっていた。

バスの中にはたくさんの囚人たち、窓ガラスに鈴なりになっているぼうつと浮かび上がった顔、顔が、私の歩みを止めさせた。バスはすぐにでも出発する様子だったから、私はバスを先に行かせることにした。彼らの視線、両足で自由に出口に向かって歩いている私に浴びせられる視線が、それほど強烈だったからだった。私は彼らの前では一歩も歩けなかった。

しばらくして護送バスのタイヤが滑り出した。囚人の一人が取り縄に縛られた両手で、ガラス窓の霜を取ろうとしていた。その動作があまりにとろくて、やるせない気分になった。

遠ざかるバスの後ろ姿を追ってトボトボと歩きながら、私は取り縄に縛られた両手のことだけを考え続けた。なんでこんなに目が回るんだろう……？

ガックリ落ちた肩が重かった。後ろで鉄の門が閉められる音が心臓まで響いた。私はゆっくりと坂道を下りて来た。心が荒涼としていて、北風さえも心に染みてきて、そのまま凍りつくようだった。向こうに栗色のマフラーをしたポラが見えた。遠くからも彼女の寒そうな姿がハッキリとわかった。ケーキ屋で待ち合わせしたはずなのに、いつからそこに出て来たのか、足を少しもじっとさせていられないようだった。私はパーカーのフードを被って風を防いでから、固い表情をほぐしながら足取りを速めた。

「会えたの？」

ポラは私の顔色から伺いながら心配そうに聞いた。

「うん」

私の力ない答えにポラはそれ以上言葉を継げず、私の後ろの巨大な灰色の建物だけをじっと見つめていた。夜通し汽車に乗って来たせいで、かなり疲れて見える彼女の顔がいじらしかったけど、私の気分はひどい状態で、何も言ってやれなかった。我々は喧嘩した者同士みたいに少し離れて歩いた。

兄の所に行くんだという計画は、十二月に入ってから考え始めたのだった。最初は新聞がすぐくさかったから気が進まなかった。母や父は、兄に会う為に拘置所まで訪ねて行くような人達ではなかった。兄に面会する人間は私しかいなかったのだ。

しかし、気持ちはずごく落ち着かなかった。その間にミングが出て行ってしまい、季節は冬になって

いた。私はナソン旅館の離れに一人残り、シラっとした家と暗闇の中の寂寞を耐え抜いていた。夜をやり過ぎて朝を迎えると、夜通し走り続けたみたいに全身がぐったりとけだるかった。昼の間も安らぎはなかった。兄の事件が投げかけたすべての波紋、それに町内ではすでに撤去作業が始まっていた。そのひどいクレーンの音、地面を揺るがす機械の音。私は完全に宙ぶらりんの状態だった。

ただど内心、出発日だけは決めておいた。それは学力テストが終った日、まさにその日の夜、夜行列車に乗ろうと。一年・・・いや中学から考えてもたったの六年間、閉じ込められて過ごしてきた受験生達の開放パーティーが開かれるその夜、私はソウルに残っていたくなかった。その夜の狂乱のことなら、私はあまりにもよく知っていた。それは完全に狂気だった。

沸き立つビールの泡に鼻を突っ込んでぶっ倒れる奴、長い列を組んで肩を組み、練り歩きながら大声で歌いまくる流行歌、タバコを口にくわえて群れている奴ら。

路地裏ごとに見られるゲロと立小便の跡はどんなにムカつくことか。あちこちで上がる女達の悲鳴と笑い声。その日は・・・その日一日だけは、どれだけ羽目はずしてもすべてが許されると信じている奴らの狂った行為は二度と見たくない。だからその日の夜、私は暗くなる前にカバンに荷物を詰めておいて、息を殺して時間になるのを待っていた。それが、つまり昨日だった。

そしてまさにその時、ポラから電話が掛かって来たのだった。この前、ミヨンドンで喧嘩別れした後、初めて掛かって来た電話だった。勿論、私もその間、彼女に会ってくれなんてことは言いもしなかった。全くそんなことを考える状況ではなかったからだ。なぜかそうしたくもなかった。時々、彼女が思い出されもした。丸い顔、パチパチとしばたかせていたまっげ、機嫌のいい時はものすごく優しくかった声。しかしそのすべてが取り戻すことの出来ない、果てしなく遠い過去の事ように感じられたのは何故なのか、私には分からなかった。私は慣れない状況の中でただ彼女を思い出すだけで、そこからは一歩も出られないでいた。

「何やってるの？」

ポラはいきなりそう聞いて来た。ポラはいつもそんな調子だ。まるで昨日会ったばかりみたいに、久しく連絡がなかった間のしこりなんかはすっかり忘れたように話し始めるのが彼女の常だった。

だからと言って、わたしもすぐに旅行に出る計画だと答えるわけにはいかなかった。私には、そんなことは出来なかった。それに、ポラも兄の事件を知っているかもしれないという思いの為、私の言葉には自然さがなかった。むしろぶっきらぼうだったかもしれない。

事実、私はポラからの電話が嬉しくなかった。よりによってこんな時に、開放パーティーの余興の為に私を思い出ただけだという推測は私の自尊心ともかなり関係があった。とに角、ポラは学力テストを終えて、その開放感から浮かれているところだった。しかし私としては全く、目くそほどもその気分と同調できる状況ではなかった。だから私は彼女の会おうという誘いをきれいに、ひと言で断ってしまうことが出来た。そして、列車の時間が迫っているから、この電話も長引かせられないんだと冷たく返事をした。

それでもポラは寛大だった。信じられないことだった。私があんなにも冷たく返事をしたのに、それを全く意に介さなかったのではなく、すぐに自分も一緒に行きたいとせがみ始めてしまうのだった。

「旅行？ 今晚発つ汽車で？ 本当なの？ お願い、あたしも一緒に連れてって。おとなしくしてるから。面倒起こさないから」

私の意思が弱いということを知っていた。結局、私はポラを今回の旅行に同行させることを許さないわけにはいかなかった。ポラと二人つきりで旅行をするんだと考えると気持ちが落ち着かなかったけど、それはどうしようもないことだった。

全く想像もしていないことだったけど、実際にポラと一緒に行くんだと思うと、少なからずソワソワすることも事実だった。私は兄に面会した帰り道、チョナン（天安）に寄ってミングに会う計画を立てていた。ミングと別れてもう一ヶ月が経っていた。ヤツがどうしているのかが気になって仕方なかった。一度会ってしまおうと、別れて帰る時には又胸が痛むだろうけど、それでもヤツに会いたかった。この憂鬱な巡礼に、ポラみたいな同伴者がいたらどうなるんだろう？ それは私にもハッキリとは分からなかった。

そしてポラと一緒に夜行列車に乗ってソウルを発った。ポラは約束した通り、すぐおとなしかった。時にはお姉さんみたいな顔でゆで卵の殻をむいてくれたりもした。窓に吐きかけた息をハンカチで拭き、外の風景を見ていたと思ったら、そつと私の表情を伺ったりもしていた。口では何も言わなかったけど、やはりポラも兄の事件について知っていることは明らかだった。

私の予想は当たっていた。とうとう我慢できずに私が兄の事について打ち明け始めると、彼女もモジモジと吐露した。私は彼女のひと言ひと言を、息を凝らして聞いた。

「あんたに電話してみたかったの。でも、あんたがどう思うか分からなくてやめたの」

ただその言葉だけでも私はすごく慰められた。私ともう少し厚かましかったら、彼女の手を取ってもっと慰めてもらうことも出来ただろう。そうしてもポラは怒らなかつただろう。我々は知らず知らず滑るように近づいていて、その心情の余韻を一晚中感じながらプサンまで来たのだった。三日三晩、さらに旅行をしていたとしても、お腹が空いたり眠くなりそうにない時間だった。

どんな話をしたらいいのか分からなかった。昨夜、闇の中を走る汽車の中では、少なくともこんな気持ちではなかった。しかし今、縛り縄に縛られた両手がチラチラする私の胸の中は息苦しく、気まずかった。こんなことなら、むしろ一人で来る方がもつと気楽だったかもしれない。見知らぬ都市をブラブラと気の向くままに歩き、時刻表に縛られることもなく、どこにでも立ち寄れるように。女の子を連れていけると、顔を火照らせずにうろつける場所はあまりない。

「お腹空いただろ？」

結局、私は食べ物のお話なんかをしてしまった。こんな気分ですぐに食べ物を詰め込むなんて……しかし、私は家族を連れて父親の心境で、きれいで暖かいレストランを探してみた。コムタン（牛テールスープ）・チョツパル（豚足）・ヘムルタン（海鮮鍋）・豆腐チゲ……私の目にはそんな食べ物の名前までが私を馬鹿にしているように見えた。朝、駅前で食べたトックツ（雑煮）がまだ胃の中に残っているのか、私には食欲などこれっぽっちもなかった。

ポラもあまり食欲がないと言った。我々は年を取って病気にかかった道端の野良犬みたいに力がなかった。その時、通りに駐車していた数台のタクシーの中の一台から我々に向かって声が飛んで来た。

「チョナン、チョナンに行きます！ すぐに出発しますよ！」

ポラと私はどちらともなくお互いの顔を見つめ合った。ご飯よりも今はどこか暖かくてふんわりした所に落ち着いて、しばらくぐっすり眠りたい我々にとって、いや、私には耳がそば立つほど嬉しい声だった。

私はポラの意見も聞かず、そのタクシーの後座席に乗り込んだ。前の席には派手に着飾った中年のおばさんが座っていた。その人がこのタクシーを借り切っているように見えた。聞くまでもなく、私にはすぐにそのおばさんの心境が手に取るように分かった。コチコチにこわばった肩、言葉なく前方だけを見据えている冷たい後頭部。そのすべてのものが私と同じだった。プサン駅で車を降りてこのチュレ洞まで来る時もそうだったけど、また、あの塀の後ろに兄を残して発つ気分はもっと悲惨だった。

タクシーが京釜（キョンブ）高速道路に入る頃には、私は心地よい眠りの中に落ちて行った。タクシーに乗ってチョナンまで行くことになるとは思わなかったけど、こんな休息の代価なら後で料金を交渉する必要もないだろう。私が兄の所に行くんだと気が付いた母がくれたお金は、旅費としては十分な額だった。とに角、今日の日没前までにはヨンガンニの「太陽村」に行き着けるのだから、これで一安心だった。

昨日ソウルを発つ時から、この見慣れぬ都市でポラと一日中一緒にいることが、実は心配だった。そんな時に限ってホテルや旅館の看板がいつものように見えなくて、胸の中で心臓がドキンドキンと跳ねているみたいだったけど、今やっと安心できた。ミングに会った後は、また夜行列車で上京すれば旅館なんかに泊まらずに二晩をポラと一緒に過ごしたことになる。少し忙しい日程にはなるだろうけど、そんなことは問題ではなかった。私はただ品位を守りたいだけだった。

夢の中にいるような気分だった。途中で自分が恐ろしいぐらいのスピードで疾走しているタクシーの中にいるという現実の時折戻ったりはしたが、私は慌てて夢の中に帰って行った。その朦朧さ、けだるさは何回も寝返りを打たなくちゃならなくて疲れたけど、それでも抜け出せない誘惑みたいに私にまとわりついた。そうやって眠ることも労働するぐらいのエネルギーを消耗した。目を開けた時、私は指一本動かす力がなかった。私の首がポラの肩に乗っていても、それにも気付かなかった。

「もうすぐ着くから。ここでヨンガンニ行きのバスに乗り換えなきゃならないんだって」

ポラが降りる準備をした。その運転手はこの町出身だから、こちら辺の地理に明るいということだった。車が止まって、私はポケットを探った。

「いいの。もう払ったから」

ポラは奥ゆかしいお姉さんみたいに私の背中を押した。

「早く何か食べよう。腹減ってぶっ倒れそうだ。お前も死にそうだよ」

我々はお互いのみずばらしい格好を指差しながら、その時初めて笑うことが出来た。ぐっすり眠ったわけではなかったけど、それでも眠りの効果なのか、頭の中がスツキリしたようだった。ポラは相変わらず優しく、私の気分を害しないようにすごく気を遣っていた。そんな様子が昔のうちの姉のようだった。姉ちゃん・・・私はまた心がしびれてきた。

食堂に入る前、我々は「太陽村」の子供達にあげるお菓子を買って、ついでにそこで目に付いた鳥の丸焼きも注文した。肢体障害の子供達だけが十五人で生活していると言ってたけど、足りなくならないように気を遣った。

「時間に余裕があったらな・・・ミングを連れて、ここにもまた出て来れるのに・・・」

遅い昼食を取りながら、私はずっとそれが惜しくて仕方なかった。ヤツを連れて来て、食べたいものを腹一杯食べさせてやりたかった。とは言っても、ヤツの場合、スルメじゃなければガムを選ぶことしか知らないんだけど。

ホン・ジョンミと一緒にナソン旅館を発った日もガムをいっぺんに三個も口の中に突っ込んでモグモグさせながら、まともに喋れなかったヤツだ。このお姉さんと一緒にすごい所に行っている子にしたら、兄ちゃんがすぐに訪ねて行ってやるからな、と言うと、「ガム、ガム買って来て！」と言っていたヤツだった。

私はポケットの中にしまっておいた何個かのガムを触りながら時計を見た。もう四時半。ぎっしりと重い雲を頂いている空の下、山や野原にはもう影が滲んでいた。しかし、ミングにまた会えると思うと、また力が湧いてきた。私は味も分からないほど急いで目の前のご飯をたいらげた。ポラと食べる速さを合わそうとすると、そうするしかなかった。曇ってたから暗闇も早くやって来たみたいで、なんとなく

焦燥感も感じてはいたが、ポラに対してそんな素振りは見せなかった。

食事を終えて出て来た時、ポツリポツリと雪が落ち始めた。最初は雪じやないのかと思った。どこかから火の粉が飛んで来たとか、落ち葉の屑かなんかの埃が風に飛ばされて来たのかと思った。しかし、額に触れたそのひやりとする感触、地面に落ちてすぐに消えて行くその痕跡はまさに雪だった。

「雪。雪が降ってきた！」

先にポラが歓声を上げた。その曇った空の様子からは、雪が決してそれだけで終るとは思えなかった。ポラと私はしばらくの間空を見上げていた。

我々は大きなプレゼント袋をひとつずつ分けて持ち、バスに乗り込んだ。都市の外郭を回る市外バスが普通そうであるように、そのバスもバタバタと走るようにならなびれたバスだった。しかし席がたくさん空いていて余裕がある上に、その時になってはじめて旅行をしている気分を感じることが出来たから、そんなに悪い気はしなかった。

「暖かい。膝がポカポカする」

膝の上に乗せた鶏の丸焼きを指しながらポラがにっこりと笑った。そして私を引き寄せて窓の外を見せ、低い声でささやいた。

「好き。山と野原と・・・全部全部好き」

太陽村。

木の肌がそのまま剥き出しになっている看板に、くねくねした字で彫られた「太陽村」という名前。重くのしかかっている灰色の空と、すでにかなり大粒になってきた雪の間で、私はどうしたらいいのか分からず、ただその名前だけを繰り返していた。美しい名前だった。丘の麓に肩を寄せ合っている十何世帯の村。「太陽村」はその中でも一番奥まった所であり、丘を裏庭のようにして小さく立てた平屋のスラブの家だった。日差しが差し込んだら、白く建てられた家全体がそのまま光の塊になって美しく見えることだろう。静かでこぢんまりとしたその家は、大股でズカズカと入って行くには恐縮するような、それほど綺麗な家だった。

我々がさんざん迷った末に前庭を横切って玄関に向かっている時、スツと後の方におばさんが一人、練炭を持って現れた。

「太陽村に来たお客さんですか？」

その優しい言葉使いに、私はすぐにこの人があのホン・ジョンミの先輩だということを確認した。やはり間違っていないかった。私がホン・ジョンミの名前を出すとすぐに、「あら、ミングのお兄さんが来たんですね。ようこそ。ミングがすごく喜びますよ」と言いながら玄関のドアを開けてくれた。普通の家のように門の前には個室があつて、個室の横に回ると各部屋のドアが見えた。ポラと私は靴を脱いで中に入った。練炭を入れに行ったのか、後をついて来ていたはずのその女の人はいなくなり、我々はモジモジしながら個室に突っ立っていた。オンドルに火が入ったのか、足の裏がだんだん暖かくなってきたけど、その部屋には椅子や家具が一切なくてがらんとしていた。

「ミング！ お兄さんが来たのに何やってるの？」

その時女の人が手を揉みながら入って来て、綺麗なよく通る声でミングを呼んだ。するとドア三つが一斉に開けられて、そこに生まれて初めて見る光景が広がった。驚いた。足が切れて体がねじれている子供、胴体より大きな頭を壁にもたげて立ってじつと指を吸っている子供、ずっと頭を振りながら我々をキッと睨んでいる子供。

ポラが最初に、あっ、といううめき声を飲み込んで私の手を握った。その瞬間、ミングが玉のように

飛んで来て私にしがみついた。

「兄ちゃん！ 兄ちゃん来たんだ。兄ちゃんが来たんだ」

ヤツはむちゃくちゃに私の胸に顔を押し付けて、歌を歌うように「兄ちゃんが来たんだ」を叫んだ。短く刈った頭を抱きしめて、私は堪えきれずに涙を滲ませた。匂い。それはミングの匂いのせいだった。驚くことに、ミングには何かほろ苦くて重い、一人で生きる子供特有のあの匂いが染み付いていた。顔と服装だけは、私と一緒にいた頃とは比べ物にならない程小奇麗になっていたけど、それでもその寂しさの匂いはひどいものだった。

「元気だったか？ どーれ。うん。鼻の下もきれいだし、目くそもないな。だいぶん男前になったぞ。ミング、本当に男前だ」

私が何でもいいから喋り続け、やつのことで涙を噛みしめていたその時、誰かが信じられないほど大きな声で泣きだした。

女の子だった。獣が泣いているような、とんでもない泣き声を出しているその子は、小さな体に焦点を合わせられない目をした女の子だった。すると横にいた男の子が舌足らずな声で「おばさん、ソネが泣いてるよ」と真顔で言うのだった。

「しいいっ！ うちのソネちゃんはいいい子でしょう。それぐらいにしましょうね」

おばさんと呼ばれたさっきの女の子の人が走って行ってギョツと抱き上げると、その子供は嘘のように泣き止んだ。

「お客さんが来ると子供達は自分を抱いてくれて、いつも駄々をこねるんですよ」

女の子が他の子供達をみんな部屋に連れて行きながらミングに言った。

「ミング。一時間したら夕飯だから、それまでだけ、お兄さんと一緒にいなさいね。じゃなきゃ、他の友達がずっと面白くないでしょ」

私は顔が火照った。なぜだか分からない。女の子の澄んで優しい声を聞いていると、何故か恥ずかしくなった。

「かわいそう」

子供達がいなくなったドアを見つめながらポラが泣いていた。

「ソネは泣き虫だ。チョルホはこぶが付いているんだ。背中にこんなこぶがあるんだ。兄ちゃんは知らないだろう？」

ミングは一人でつぶやくようになっていた。ひと月しか経っていないのに発音もかなりハッキリして、話もちゃんと意味が分かるようになっていて、私はすごく嬉しくなった。

「このおばさんは誰なの？ どこのおばさんなの？」

ミングがポラを指差した。太陽村では女の子はすべて「おばさん」で通じるようだった。私はポラが答えるように黙っていたのに、ポラはただ笑い転げているだけだった。ポラは初めて見るミングをどうやって扱っていいものやら分からないようだった。私はミングを膝に座らせて、ポケットからガムを取り出してやった。ミングの顔が一気に明るくなった。

「ガムだ。わあ！ ガムだ」

ヤツはまた何個もいっぺんに包み紙を剥いて一口に入れてしまい、力いっぱいガムを噛み始めた。口元に垂れる涎を拭いてやっていると、初めてこいつに会った日を思い出した。老人についてクンポに行った日だった。見た目には小学校に通いだしてだいぶん経つような男の子がお尻を出して、涎を垂らしながら布団の端をクチャクチャ噛んでいた姿が今も目に浮かぶ。大量に流れ出る涎、黄色い鼻水と、ねじまがるほど瘦せこけた足。その時は本当に驚いた。

しかし黒く澄んだ目は、しばらくの間、妙に私の記憶にこびりついていた。私はあらためてヤツの目を覗いて見た。今でも澄んでいてきれいだった。私はそっとヤツの頭を引き寄せて抱きしめてやった。「兄ちゃんもここに住め。おじいちゃんも連れて来て」

私の胸に抱きしめられているせいで、ミングは機嫌が良かった。ヤツはずっとおじいちゃんも連れて来て、みんなどこに住もうと繰り返し返していた。私には返す言葉がなかった。ヤツの言葉通り、ソウルを捨ててこんな場所に移って来て住むことを夢見ていないわけではなかった。ソウルを離れてしまうことも出来た。しかしそうはいかなかった。ソウルを離れたいから、尚更ソウルを捨てられなくなっていることを、どうやったら簡単に説明することが出来るのだろうか？

ミングとの一時間は、手の平に落ちて来た一粒の雪が解けるように短かった。一時間が過ぎると、きつちりとおばさんが現れた。その後ろには、また泣きそうな表情の子供達がゾロゾロくっついて来た。子供達は、食事の準備なのだろう、顎の下に白いナプキンをみんな同じように巻いていた。

「さあ、ミングも首タオルしなきゃね。こっちに来て下さい。食事でもしてもらおうと準備をしたんですよ」

私は言いよどんだ。するとポラがすかさず、そして優しく返事をした。

「ありがとうございます。でも、もう帰らなきゃならないんです。他の子供達にも悪いし」

「残念ね。お二人のお陰で今日の夕食は鶏のご馳走なのに」

子供達のおばさんは、それ以上誘いはしなかった。ふとホン・ジョンミが言ってくれた言葉が思い浮かんだ。名前のついた日だとか、じゃなければ自分達の気が向いた時にだけ、騒がしくやって来て子供達をそのかす慈善家たちの為に、わざとうら寂しい田舎を探したのだと。まともじゃない体をした子供達は、自分で立ち上がる考えより先に、いつ来るか分からない来客を待ちながら悲しみから覚えるのだと。

私はミングの首に白いタオルを巻いてやった。ヤツはすでに半べそをかいた顔で、死ぬほど私の顔、私の視線だけを追っていた。そして絶対に逃がさないように私の腰を両手でぎゅっと掴んでいた。私はだんだんと胸が詰まってきた。

「兄ちゃん。行くな。ご飯食べる。ん？ここに住め」

ヤツが足をドンドンと踏み鳴らした。私が何も返事をしないでいると、「僕も行く、僕も行く」と言いながら、ヤツはずっと泣きわめいていた。

おばさんは冷たかった。離れようとしないうちにミングに向かって、きちんきちんと話してやっていた。

「ミングは太陽村のお兄ちゃんでしょう？ 妹や弟が見ている前で、おばさんが聞いている言葉にちゃんと返事してくれなくちゃダメよ。分かった？」

「はい」

こいつ。はい、なんて答えることも覚えていた。

「お兄さんに着いて行きたいなら、一緒に行ってもいいわよ。その代り、ここの友達たちは、ミングに会いたいわって毎日毎晩悲しくて泣くのよ。ミングも友達と別れば寂しいはずよ。どうするの？ みんなが悲しくなる方がいいの？ それともミングだけがちよっと悲しくて、大きいお兄さんらしく我慢してみる？ よーく考えてから答えてちょうだいね」

涙ぐみながら、ヤツは私と友達たちを代わり番こに見比べていた。その小さな顔には、困っている気持ちがありありと表れていた。私はわざと暗闇に包まれて行く村の前の白い山を見ながら、ミングの返事を待った。

「まだ答えが出ないの？ もっと待とうか？」

子供達がジツと見守っている前で、おばさんが優しく催促をした。台所にいた二人のおばさんもジツとその成り行きを見守りながら立っていた。ヤツはそっと私の腰を掴んでいた手を下ろした。そしてまたキョロキョロとみんなの顔を見回した。そして、ついにミングがゆっくりと口を開いた。

「ミングだけ、一人、悲しがる。みんな、泣くのいや。怖い」

おばさんがニッコリしながらヤツの頬にキスをした。

私は黙って振り向いた。ポラも何も言わず私の後について来た。おばさんが言った。

「さあ、それじゃあ、ちゃんと挨拶してみなさい。お気を付けてお帰り下さい、って。さあ」

私はスニーカーの紐を結ぶからと言ってうつむいていた。胸が張り裂けそうだったから、ヤツと笑いながら別れることは難しかった。私は泣きたくなかった。ヤツに泣き顔を見せたくなかった。私は長い時間、スニーカーの紐を結んでいた。ヤツを褒めてやりたくて・・・褒めてやりたいのと同時にいじらかった。しかし、何かしら別れの言葉を言わない訳にはいかないだろう。

「ミング、また来るからな。会いたくなったらすぐに・・・」

ヤツがノロノロと前に進み出て来た。

「お気を、付けて、お帰り・・・下さい」

そのまん丸くて黒い目に光る涙を、私はじっと見つめていた。ヤツを褒めてやりたくて・・・褒めてやりたいのと同時にいじらかった。こいつ。もう、お前ひとりでこの世の中を渡って行っても大丈夫だな。

太陽村では、雪の光が日差し以上に明るかった。みそかの夜だから月は出ていないけど、いくつもないう村の家々には窓の明かりも薄暗いのに、広い道を歩く我々は暗さを感じていなかった。

サクサクサク。

その頃には、雪は踏みしめると足が埋もれるほど積もっていた。電線の上に綿みたいに積もっている雪が風に吹かれて銀箔紙のように散って行く様子も、別世界にいるようで美しかった。私は雪だけを見ている、雪のことだけを考えることにした。ミングについては、ヤツの成長だけを心に刻み付けることにした。そうすることにした。だから私はこれ以上「太陽村」を振り返りはしない。私は必死で前だけを見つめていた。

雪は止めどなく降り積もり、ポラはさつきから黙り込んでいた。雪が面白いといって、わざとバスを一台やり過ぎたポラだった。そして、ずっと沈黙を続けた。太陽村を出ながら「泣きたい。自分のことがすごくみすばらしいわ」とため息のように吐き捨て、今もその気分が続いているらしかった。私は彼女の吐く息を横目で見ながら、試験がひどかったという彼女の言葉を思い出した。

「うちの家族はね、あたしになんかには関心がないの。ただ、弟が何かで失敗するんじゃないかって、ただただそれだけが最大の関心事なんだから」

ポラの高三の弟は我が国最高の大学に、それも最高の学科に願書を出したらしかった。ポラのお姉さんもその大学に通っていた。真ん中に挟まれたポラの立場がどんなだかは想像がたった。だからポラは家に帰るこの道が憂鬱なのかもしれないなかった。

どの位歩いただろうか？ 足がズボズボと雪にはまってしまい、歩くのが難しくなってきた。そうしてみると、いつからか車の往来も途切れていた。それほど多くはないにしても、たまには車が通り過ぎていたはずなのに。

周囲は恐ろしく静かで、私は濡れたスニーカーの中の足の指がしびれてしまい、だんだん歩きづらくなってきた。

「いつまで歩くんだ？」

バスがもう来ないかもしれないという不安を訴えたかったけど、ポラは私の言葉なんか無視して黙々と先を進んだ。そんなポラの背中を叩いてやりながら私がまた言った。

「もう歩くのは止めよう。どうせバスに乗るんだから」

するとポラが私の真似をして、

「どうせ？」

と聞き返した。それは喧嘩でも吹っかけるような言い方だった。でも私は我慢した。私はポラと喧嘩するのが恐かった。今は誰とでも、ポラとは特に、喧嘩をしてしまうと取り返しがつかないことになるという気がした。

「うっとうしい。あんたは平気なの？ あたしは吐き気がするような、あんなバスに乗りたくないのよ。このままずっと歩いて行けたらいいのに」

ポラが前を見つめながら歩くその姿勢のまま、叫ぶようにそう言った。怒っているような声だった。

「歩いては家に帰れないじゃないか」

私としては、それでもポラを慰めてやろうとして言ったセリフだったのに。しかし、ポラは私の言葉でまた気を悪くしたようだった。

「家、家、家。そうよ。あんたは家しか知らない子供なのよ。凶体だけ大きくても、やっぱり……」
やっぱり、と言う時、その中には明らかに軽蔑が込められていた。これは本当に突然の揶揄だった。特に、凶体だけ大きいとかなんとかいう言葉は、聞き逃せないほど頭に来た。

それこそ私が一番聞きたくない話の内のひとつだった。私が大人でも子供でもないまま、のらりくらりと中間地帯にいるのは私のせいではなかった。そのことはすごく情けなかった。一体、いつになったらこの曖昧な地帯から抜け出せるのか、それさえ分からない。かといって大人にならないわけにもいかなかった。広がり始めた骨格をどうやって縮めることができるのか？ どうせ成長しなければならぬのならパツと早く骨格が成長してしまい、そうやっていっぺんに飛び越えてでも大人の世界に行く峠を越えたいと思ったこともあった。

しかし、どれも私の思い通りになる事ではなかった。そういう問題はいつも私の管轄範囲内ではなかった。私に与えられているのは、この世の中が用意したさまざまな障害物の前でオロオロと這いつくばること、ただただその役回りだけだった。情けないことだ。

私が怒ったのは、もしかするとその情けなさのせいだったかもしれない。半信半疑なら、もう振り返るのも嫌なほどウンザリしていた。それが水なら洩れ出すぐらいだし、それがご飯なら喉までぎっしり詰まっっていて、これ以上は飲み込めない状態だった。それに対する怒りはすでに危険水位を突破していた。

「頼むから、俺を怒らせるな」

私は陰鬱に、そして冷たくそう吐き捨てた。ポラが雪を丸めて足に投げつけながら言った。

「怒らせたなら？ 怒らせたらどうするって？」

「俺、切れるかもしれないんだ。そうになったら俺自身も責任持てないんだからな。分かったか？」

すると、おかしな程突然、自分の体中からカツと乱暴な気持ちたちが湧いてくるのを感じた。私は本当に暴れ出したかった。雪の中を狂った野良犬みたいに転がってみると、骨がぐんぐん伸びるかもしれない。私は両手の拳と両足に力を込めてポラを睨んだ。

驚いたことにポラは悲しげな目でジッと私を見つめていた。いつもならここで何かしらひとこと言うはずなのに、ただジッと見つめているだけだった。私は睨んで、ポラは悲しげに見つめて。こういう時

にはどうしたらいいのか、私にはさっぱり分からなかった。私はどう振舞えば乱暴なのか、それさえも分からない馬鹿だった。

恥ずかしくなった私が最初に視線をそらせた。ポラも視線をそらして、雪の塊を作って遠くに投げ始めた。しばらくするとポラは暑くなったというように、首に巻いていたマフラーをはずした。そして、持つて、とも言わずにそれを私の方に投げてよこした。さっと胸で受け取った彼女のマフラーからは甘い香りが匂って来た。するとカツとなっていた気持ちが緩んで、少しづつ気分が落ち着いてきた。私は周りを見回した。誰もいなかった。青みがかった大気の光の中で輝くポラと私、二人つきりだった。私はマフラーを胸に抱いたままポラを見た。雪を投げ続けている動作が彼女を暖めて、顔は赤く火照っていて、息はハアハアとはずんでいた。そんな彼女の前に立っているのが、急に気まずく感じられた。息苦しくなるほど呼吸も自由が利かなくなってきた。おかしかった。本当におかしなことだった。

私はその気まずさで窒息する前に、とうとうその場所から動き出すことにした。私は走り出した。狂ったように走った。私に行く手を阻まれた雪の粒が霧のように私の周りを包んでくれた。

私は走りながらも自分が何故走り回っているのが分からず、相変わらず気まずい気持ちのままだった。周囲はものすごく静かで、銀色の世界は美しかったけど、しかし得体の知れないその恐怖は何故こんなにもしつこいんだろうか？ それは一体何なのだろうか？

途中でふと振り返ると、遙か遠い所に点になってしまったポラが見えた。ひとりぼっちで追いかけて来るその姿が私の胸を打った。何が恐くてこんなに逃げ回っているのだろうか？ はあはあとあえぎながら白い息を吐きながらしばらくその場に立っていた私は、そのまま雪道の上に座り込んでしまった。突然、寂しさがドツと押し寄せてきた。その恐怖が何なのかは分からないけど、しかしもう逃げたくはなかった。私は雪の中に大の字に寝転んだ。もう息苦しくなくなっていた。ここにこうやって寝転んで全身雪まみれになって空を見ていると、本当に長かったなあという思いがした。

その思いに目頭が熱くなった。このまま雪に覆われて跡形もなく消えてしまい、雪解けの頃、全く違う姿でまた現れたかった。しかし、それは夢だ。私にもそれはよく分かっていた。私は今雪の上にいるのだ。ここにこうして。これがまさに私なのだ……。

私は空に向かって力いっぱい両腕を伸ばしてみた。低く垂れこめた空に触れてみたかった。触ってみたかった。空を触るには、あまりにも短い二本の腕を空中で振ってみたりもした。ヒラリと落ちて来た雪片が私の両腕に当たりそうになると、驚いてそれを避けて散って行った。私はこのまま雪花になってもいいなと思った。白い雪の中で咲く白い花、その美しさをハッキリと思い浮かべる為に、私は目を閉じた。

しかし、何故こんなにも静かなのだろうか？ 目を閉じてみると周囲の静けさがもつと強烈に感じられた。道を間違えたんじゃないだろうか？ 雪が我々を誘惑して、今、大平原をさ迷っているのかもしれない。この道は海に通じているのかもしれない。

しかし、道じゃなかったらどうしよう？ 閉じた目にもっと力を入れて、私は心の中でこの無垢な静寂を受け入れようと精神を集中した。道じゃなかったらどうしよう？ しかし、昔から私には道らしい道なんか与えられたこともなかった。私はもう恐れない。私は注文でも取るようにそうつぶやいた。恐怖なんかは恐くない……。

穏やかだった。寒さを布団代わりに、降って来る雪を歌代わりにして、静かに待ちながら雪花みたいに白い眠り、白い夢を自分のものに出来そうだった。その時、何か得体の知れない物が私を揺すった。最初はそれが何なのか分からなかった。空气中に得体の知れない匂いが混じっていると感じた瞬間、私の頬に冷たくてしっとりとしたその何かがそっと触れた。

それが唇だということに、しばらくして気が付いた。冷たくてしっとりとしたそれは、ポラの唇だった。想像もしていなかったことだった。私の体はあつという間に石のように固まってしまった。そして、もつと息が詰まるような事が続いて起こった。ポラはためらいもせずに私の唇に自分の唇を重ねてしまった。

気が遠くなった。何が起こっているのだろうか？ 私は目も開けられずに彼女の唇を受け入れた。水でいっぱいになったガラスコップが波打つように、気持ちしがひどくゆらゆらしていた。水がこぼれるかと思つて、私は指一本動かさなかった。

唇は、二人の唇はしばらくそのまま止まっていた。何も我々の邪魔をしなかった。銀色の世界はいつまでも静かで、動くものは何もなかった。私はただ自分の心臓の音が外に洩れないことだけを祈り続けていた。

しばらくして、ポラの唇が少しずつその場から離れていった。彼女の花びらみたいな唇が私の顔のあちこちをさ迷った。唇が私の震える脛に來た時、ため息が出て來た。ポラは長い間私の目から唇を離さなかった。彼女の暖かい鼻息が私の額に当たつていて、私は少しづつ気持ちがほぐれていった。

再び彼女の唇が私の唇に重なつた時、私はそつと腕を広げて彼女を抱きしめた。お互いの心臓が跳ねる音、我々はそうやってじつとしていた。ポカポカしていた。もう寒くもなかった。彼女も私の胸の中で暖かさを感じていたなら。私は精一杯優しく彼女を胸の中に抱きしめた。言ひようのない平和、説明することの出来ない平穩が私を包み込み、我々を取り囲んでいるようだった。

やがてポラが体を起こした。私も腕を解いた。我々は自分たちの体に付いた雪を叩いている間、視線が合うんじゃないかと必死で違う所を見ていた。何か言葉を掛けてやりたかったけど、この気まずさを消し去りたかったけど、とても適当な言葉は思い浮かんでこなかった。

我々はまた道を歩き始めた。お互いに言葉は交わさなくても、心はまだポカポカしていた。途中で私手が差し出すとポラは叩き落とさずにその手を握つた。我々はそうやって手をつないで雪道を抜け出した。

その夜、我々はご飯を食べた村まで歩いて來て、チョナンに向かうバスに乗つた。バスは大雪のせいでそこまでしか運行していなかった。人々は降り続いた雪のことを話していた。ざわめく声、明るい電灯、連続ドラマを映し出ししているテレビなんかに接すると、今までポラと私が留まっていた世界が夢の中のことのように遙かに感じられた。通りになると、ずつと握つていた手も離してしまつた。私は置いて來たあの場所の平和が懐かしくて、バスの中でもずつとそのことを考えていた。

そして、我々はソウル行きの夜汽車に乗つた。並んで座り、通り過ぎて行く窓の外の暗闇を見つめていた。ソウルに近づくに従つてだんだんと雪景色が少なくなり、明け方のソウル駅の広場は嘘のようにきれいだった。昨日の夜、ソウルにはあられさえも降らなかつたのだ。灰色の都市のジメジメした早朝の様子を見回しながら、私は啞然としてしまつた。

年末が近づいて來て、やつと工事の音が止んだ。休みなく鼓膜を響かせていたあの音が消えてしまつても、耳元には相変わらず長く鈍重な余韻が残つていた。幸い天気は穏やかだったけど、区画整理のせいで生まれた荒涼とした雰囲気は水銀柱とは関係なく心を凍りつかせた。

町内はそのまま廢墟と化してしまつた。まだ撤去されていない家もギクツとさせるほど赤いペンキで殴り書きされてあるハサミのマークのせいで、家の温かみは全部抜け出てしまつたようだった。骨組みだけが残つているセメントの壁、風に揺らめいている汚れた壁紙、踏みつけられて崩れた瓦の山。出掛けて行つて歸つて來る時には、そんな風景を見たくなくて、わざと地面だけを見ながら歸つて來た。

「こんな所じゃ住めないね。お化けが出そうで、こんな町にはこれ以上いられないよ」

そう言いながらも母はずっと迷っていた。見つけてあるアパートは残金まで払ってあり、もういつでも入れる状態だったけど、母はそう簡単にはナソン旅館を捨てて出て行きはしなかった。そんなもの、いつだって一日で引越すれば済むことだし、もう少し様子を見ていようと言いつづけているのだった。それだけではなく、母は今でも「これからどうやって生きていけばいいんだい？」と悩んでいるところだった。考えていることはたくさんあるだろうけど、まだハッキリとは決められない理由を母は、「気持ちにガタガタしててね」と言うのだった。兄が確定判決を受けた後ならどうか知らないが、こんな状況の中で食べていくだけの仕事を考えてそれを実行に移すには、母は疲れ過ぎていた。

兄についての情報はホン・ジョンミを通じて詳しく聞いていた。私が兄に会いに行つて来た直後、裁判の日程が決まり、兄の最初の公判が開かれた先週の月曜日、ホン・ジョンミはプサンに下りて行つた。ホン・ジョンミをはじめとする兄の同僚たち、それにいくつかの在野団体が傍聴席を埋め尽くしたという知らせは新聞で読んだ。ソウルに帰つて来て、うちに寄つた彼女は決して心配しないようにと念を押し、これから続けて控訴をするだろうし、従つて戦いは今やつと始まつたに過ぎないから、ゆつたりとかまえていなければならぬと言つていた。

最初の事実審理の時、兄はこれ以上ないほど沈着で堂々としていて、傍聴席を埋め尽くす人たちに深い印象を植え付けたということだった。どうしてそんなことが出来るのだろうか？ 兄はホン・ジョンミに、自分が十年の懲役を受けても二十年の懲役を受けても何の問題にもならないと言つたらしかった。実際、兄の事件の場合、法定最高刑が死刑だという理由に（この言葉を聞いた時、息が止まりそうだった）、検察求刑がどう出るか、とても悲観的だという話もあった。

私は兄に関する報告を聞くと、いつも兄の胸の奥に隠れている熱い思いに手を触れた感じがして、どうしていいか分からなくなった。その火花はあまりにも熱かった。まるでこの世のすべてのふいごを動員して、ありつたけの力でおこした火の塊みたいに。私の兄のどこにそんな火の塊が隠れていたのか、私には全く分からなかった。

兄もそうだったけど、ホン・ジョンミもまた驚異的だった。彼女は法定最高刑云々という話の時には、いつも鼻笑いを浮かべた。弁護団もやはり士気が上がっていると言つた。ホン・ジョンミでなかったなら、誰が我々家族にこんな希望の気運を湧かせてくれただろうか？ 母や父はもう新聞なんかは見ようとせず、ホン・ジョンミの言葉だけを信頼しようと思つて決めているようだった。

引越しの日が決まつたのは、兄の一番公判が終つてからだった。母はまるで迷つた気持ちを持ち振り払うかのように、年が明ける前にこのうんざりする町から出て行くことを決心した。どうせ次の月にはこの家を撤去するという通告があつたから、母の引き伸ばしも限界に達したのだった。

それと同時に、大学入試の合格者発表があつた。ジュノはどうか（あいつの言つた通りに表現すると、昔なら見向きもしなかった大学の）大学生になる資格を得た。ジンフィとジョンシクは、最初から前期には受験しなかつたのだと言つた。ジュノからポラのことを聞いた。ポラは不合格だった。ヒョンムみたいに精神病院に閉じ込められているヤツもいるのに、ポラ程度ならまだ機会がたくさん残っているから、心配することはないというヤツの落ち着いた（合格者ゆえの）解説を聞きながら私は胸が痛んだ。

しかし、ポラに連絡はしなかった。不合格の経験なら私には十分過ぎるほどあつた。そんな時には、むしろ放つて置くのがよっぽど慰めになった。この世のあらゆる優しい言葉も耳には届かなかつた。見えるものすべてが嫌で、聞こえて来るすべての音にひとつ残らず傷つけられた。今度また落ちたら、わざとでもお姉さんや弟が一番軽蔑している大学を選んで後期願書を出すんだと言つていたポラだった。心配にはなつたが、やっぱり私には彼女を助ける術がなかった。

ポンチャクおばさんのお陰なのか、幸い、連日穏やかに過ぎて行った。おばさんは最近「この寒さはどうなってるんだい？」というのが口癖になっていた。

「何の仕事を始めるか知らないけどね、人がいる時はいつでも呼んでくださいよ。え。愛憎入り混じっても、人情だけはあるんだから。ふううっ。名残惜しくしょうがないね。え」

おばさんの歌声も、話の終わりごとにくっ付いていたあの「え」という声も、これで聞き収めだった。

その何日の間、私の夢はいつも涙でぐっしょりだった。現実の中よりも、夢の中の私の方がこの別れをもっと悲しがっていた。ある夢では、涙の洪水がコンタクトレンズを押し流して、それをはめられずに慌てたりもした。一度も朝まですんなりと眠り通したことがない程ひどく落ち着かなかった。眠りから覚めると、がばつと跳び起きて廊下をうろついた。裏口がガタつと音を立ててもすると、急いで走って行って錆びた取っ手を引っ張って、陰惨な路地裏の通りを廃墟のゴミの山の最後まで覗いて帰って来た。

正直言うと、私はずっと姉を待っていたのだ。母が引っ越しの日を決定するとすぐに私は姉のことを思い浮かべ、そして「光」に電話をした。姉とは直接話が出来なかったけど、電話を受けた人が必ず伝えてあげると約束してくれた。

姉は必ず帰って来る。私はそれを信じた。他の人達には分からないだろう。姉や兄、そして私がナソン旅館に抱いていた愛を。それは時にむさ苦しく、時にゾツとしたけど、それよりもっと細やかで居心地がよかった。我々の愛の中に込められた憤怒と憎悪と悲しみのない、こんな固い愛情の絆を結ぶことができたなんて。

私が待っていたのは正しかった。夢のような出来事だったけど、影のように突然消えてしまったけど、姉はナソン旅館の最後の夜を決して逃しはしなかった。しかし姉の帰りについて、私にはどうやっても説明することができない。本当だ。明け方に目が覚めてから姉が消えてしまったのを確認して、私はこれが夢であつて欲しいと思つたほどだった。

姉は忘れずに裏口を叩いた。いや、叩いたというよりも、撫でていたと言う方が正しかった。私は遅くまで自分の部屋の荷物をまとめながら外の気配に耳を傾けていたけど、門を叩く音は決して聞こえなかった。それでも私がある瞬間、何かに惹かれたように裏口を開けてやったのは、姉の声にならない叫びに対する私の心の自動的な応答だったのかもしれない。今は寂しさから言ってしまうけど、姉と私はそんな仲だった。

私が門を開けた時、姉は黒い上着の襟の中に顔を隠し、後ろに後退った。姉が来ることは分かっていたから、私は大げさには騒がなかった。

「あたしの部屋に行くから」

姉の最初の言葉だった。その夜、姉はたった二回しか口を開かなかったけど、自分の部屋に行くという言葉と、もうひとつは兄に関してだった。

「兄さんに私の事は言わないでよ。絶対に言っちゃダメよ。面会に行つても言っちゃダメだし、手紙に書いてもダメ。あんたがもし言つたらただじゃおかないから」

すると「恐い」と言いながら、ブルブルと体を震わせた。姉が使っていた電気毛布を出して敷いてやり、それでも冷え切った部屋の寒気が心配になり私の部屋に行こうと何度も誘つたけど、姉はその後、全く喋らなかつた。姉は完全に別人のようだった。芳しい花みたいだった、飛び回る蝶々みたいだった以前の姿は洗い流されたように消えてなくなつていた。枯れ枝みたいにあんなにつやがなく痩せこけた姉を見ると、喉が詰まってしまう、私も口をきくことが出来なかつた。

私は姉をひとりにしてあげた。姉もどうしてもひとりでいたいようだった。私もまたその蒼白な顔と、止めどなくキョロキョロしている不安に満ちた視線を長く見ていることが出来なかった。

姉をひとり残して出て来て、私は夜明けが近づく前に姉の部屋の練炭の火を見守った。私の部屋に入っていた火を取って姉の部屋に入れてやった。そして、よく燃える練炭の火を絶やさないように、寒いのも忘れて裏庭を出たり入ったりしていた。私はただ姉が暖かい部屋でぐっすりと眠れることだけを祈った。

二回目の新しい練炭を入れて東の空がうっすらと明るくなってきたことを確かめ、その後で私は少し眠ったようだった。眠ったといっても糸のように細く浅いものだったけど、なんとその間に姉はこっそりと家を抜け出てしまっていた。二回目に新しい練炭を入れた時、確かに姉の靴を確認したのだった。おとなしく置かれてある靴を二回三回と見つめながら喜んでいた。ぐっすりと眠っている姉を起こすかもしれないと思い、私がどれほど注意したことか。姉がポカポカした部屋で寝ていると考えると、どれほど嬉しかったことか。

しかし姉は行ってしまった。いつまた来るといふ言葉もなく、お前のお陰で本当に暖かく夜を過ごせたといい挨拶もなく行ってしまった。まだ姉の香りが残っている空っぽの部屋を見回しながら、私は昨夜、長い夢を見たんだと考えた。あまりにも生々しく、夢だと言うことさえおかしな、そんな夢を見たんだと。

誰も姉が来たことに気付きはしなかった。姉はそうやってナソン旅館の自分の部屋で短い夜を過ごし、また自分の世界に戻って行ってしまった。それはまるで翼を無くした天使が夜にだけ星の光に乗って空の国に通うという童話の中の話のように悲しく、あっけない再会だった。

しかし、私は姉を憎んだり恨んだりほしくないことにした。姉は姉のやり方でナソン旅館との別れの儀式を行って行ったのだ。姉はナソン旅館を、私を、我々家族を相変わらず愛しているという証を、そうやって見せてくれたのだ。それだけでも私には充分だった。

その朝、引越しが始まった。まとめられた風呂敷包みを路地に出して置いて、父は「ナソン旅館」と書かれた色褪せた木の看板を取って長い間眺めていた。父にはその看板が捨てられなかった。

「持って行ってみよう。捨てるのはいつでも出来るんだから」

そう言いながら、父はそれを荷物の間に差し込んだ。母も父と同じだった。置いて行くとしてもどうしても振り返ってしまうんだと、その古い手金庫を布団の中に一緒に詰め込んだ。そしてすぐに荷物を積むトラックと人夫が到着して全部そのトラックに載せて行ってしまった。

しかし私は残った。運転席の横には席がなくても人夫たちと一緒に荷物の中に埋もれて行くことも出来たけど、私は荷物と家族に着いて行かなかった。本当にこんな風にドヤドヤと、押しつけるように行ってしまいたくはなかった。今行ってしまったら、それっきりだった。近い将来、フォークレーンと巨大なハンマーがやって来てナソン旅館を飲み込んでしまうのだ。土ぼこりを上げながら崩れ去って行くナソン旅館を思い浮かべると、私の胸もガラガラと崩れてしまいそうだった。

寒さも感じないまま、そうやってどのぐらい立っていたらどうか？　もう行かないやならないと思いつながら歩き始めた時、路地の向こうに誰かが現れた。私は自分の目を疑った。まさかとは思ったが間違いなかった。白い歯を剥き出しにして笑っているその人は、確かにムクドリおじさんだった。

彼を見た途端、目の前がかすんでしまった。私は熱くなった目をこすりながら、彼が近くに来るまで待っていた。私が彼に向かって行くことも出来たけど、何故か足が動かなかった。陶磁器片のように冷たく光る冬の日差しを踏みしめながら、彼が私の所までやって来た。喉まで上がっている黒いセーター、

おじさんは以前よりもカッコよく見えた。

「俺達、こうやってまた会えたな」

おじさんが言った。以前と同じ、あの顔、あの声。ああ、本当にこんな風に会うことも出来るんだな。私もやはり彼を見た瞬間からずっとそう考えていた。

「いつ、こうなったんだ？」

おじさんはゴミばかりが転がっているナソン旅館を見回した。

「今日。今さっき出て行ったんだ」

私もまた荒涼とした家を見回しながら、今更のように沈鬱な気になった。

「それで、お前は？」

おじさんがじつと私の顔を見つめた。

「なんとなく。なんとなく残っていたかったんだ」

「こいつ。相変わらずだな」

おじさんは私の頭を、その広くて暖かい手で撫で回した。私の口癖が相変わらずなら、おじさんの頭を撫でる癖も相変わらずだった。

「ちよつと入ってみるか？　すぐに撤去されるんだろ？」

まずおじさんが軋む玄関の門を開けて中に入って行った。我々は靴を履いたまま離れから覗いていった。部屋のドアを開けるたびに、垢だらけの赤いカーテンがはためいていた。洗面室には痰のように溶けた安物の石鹸の欠片が捨てられていた。おじさんは自分が泊まっていた九号室のドアを開けた。長い間、人が入っていない部屋からは外よりもさらに強い冷気が染み出てきた。

「そうだ。最初にお前に会った時から、あの時から普通じゃなかったんだ。お前は知らないだろうけど、私はいつもお前から大きな力をもらっていたんだ」

彼の声が細く震えていた。

「考えれば考えるほど奇異な因縁だな。お前を振り切ってプサンに行って万端の準備をしている時も、たまにお前のことが思い出されたんだ。しかし、お前の兄さんの方が俺より早かった。最初は、俺がみんなにも気になっていたら人間がお前の兄さんだっていう事が全く信じられなかったんだ」

兄もそう言った。信じられなかった、と。でも、前の時代では十分にあり得ることだと言った。あの日のあの言葉を、私はひと言も忘れずに覚えていた。

「お前はいい兄さんを持ったな。お前ともそうだったように、お前の兄さんとも会ってすぐに仲良くなった。兄さんの所に行くとな、二人でお前の話をたくさんするんだ。そうしたら兄さんもお前の話を聞いて、すごく喜ぶんだ」

私は大きく息を吸った。するとかび臭い埃の匂いがして、背中に一筋の鳥肌が立った。寒かった。私は十号室を覗いているおじさんにすごく簡単に老人の死の事を教え、ミングの事についても教えた。

その時おじさんが私に投げかけた一瞥は、何と言おうか、説明するのが難しい複雑なものだった。それは例えば、あたふたとこの世で生きることの哀歎に送る四十歳の男の寂しさみたいなものがいっぱい染み込んでいる視線だった。以前の驚くほど火花が飛び散っていた眼差しは、もう消えているだろうか？　私はもう一度彼を見てみたけど、寂しさの影以外にはもう何も読み取れなかった。

我々はまた庭に出て来た。がらんとした家の中よりは、日差しを浴びている外の方がよっぽど暖かかった。我々は玄関の門をまっすぐに直してからナソン旅館を後にして、並んで路地を歩いて行った。崩れた建物の残骸にも平等に降り注いでいる冬の日差し、そのゴミの山の間から、主人を失った猫が一匹、無邪気な視線を我々に投げかけていた。同じ事を考えていたのだろうか、彼がふとミングに会いたいと

言い出した。

「昼間は体を酷使して働き、夜には息子がひっくり返している勉強を見てやりながら、父親の役目を果たすのがまだ大変だけど、ちよつとずつ良くなっていくだろう。良くなることは」

そこで話を切ったまま、しばらく考えに浸っていて、やがて彼の顔にスツと笑いが広がった。

「俺は昔、息子が十人ぐらい欲しかったんだ。本気でそう思ってたんだ。だいぶん寂しかったんだな。でも、今はソンジユンのヤツしかないんだ。息子がもうひとりいたら、もっと楽しいはずなのに。もつともつと……」

私には、彼がミングのことを話しているんだということがちゃんとわかっていた。しかし、私は何も言わず歩き続けた。こんな時は何の話をして意味がないということを知っていた。私は目を細め、眩しい太陽を見上げた。丸い太陽は赤い宝石みたいだった。北風が吹きつける陰惨な冬にも、空には赤い宝石みたいな太陽があるということを今更ながら不思議に思った。

我々は大通りが見える所まで来て別れの握手をした。彼は最後まで私に対して、いや私の前にある未来に対してひと言も尋ねなかった。そうしてくれた彼がとてもありがたかった。別れながら彼は、また私の頭を撫でた。看板が森を作っている道の中に消えて行くおじさんの広い背中を、私はしばらくの間見守っていた。

そして私も振り返った。無意識に路地の方に向かって何歩か歩きかけたところで、私ははたと立ち止まってしまった。部屋同士がお互いに体を寄せ合いながらブツブツ言っているようなソソ旅館は、今や私が帰る場所ではなかった。私は呆然として、見慣れた光景のひとつひとつに染み込んでいる時間のかけらを見ていた。その止まっている時間の中に私は空気ささえ震えない静けさを見た。その静けさ、とうてい言い表わせない平穏な瞬間の静けさを、吹きすさぶ風がいっぺんからめ取ってしまった。

再び路地から出て来ながら、私はすぐそばに、まともに糊付けがされていなくて、パタパタはためいている張り紙を一枚発見した。それはぼろきれみたいにベタベタと張っている他の紙に比べると、最近張ったものなのか、一番きれいに見えた。私は近寄ってみた。生産職男女社員〇〇名募集。初心者歓迎。旗みたい。パタパタとはためいていたそれは求人広告で、私が読んだのは、その二つの文章と電話番号だった。

〈 終 〉